

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

米作り

北海道には、稲作中心の農耕文化である弥生時代が存在しない。縄文・続縄文・擦文と、本州大和系とは異なる独自の採集経済社会を形成し、米を作らない時代が長く続いた。

しかし、江戸時代になって、米作りを試みる者が現れた。元禄五（一六九二）年には亀田村で作右衛門が、わずか二〜三年であつたが挑戦した。また元禄七年には上磯で米ができ、松前藩主に献じたという記録も残っている。

さらに幕末になると津軽や南部の種籾が道南へと持ち込まれ、青森とさほど変わらない気象条件の地、大野を中心に「赤毛」と「白髭」という地米が作られ始めた。北海道に暮らす人々には、「米を食べたい」という思いが強くなったのである。

そして明治

開拓使が招聘したトーマス・アンチセルが、明治四年、米作りに関し道南・道央の調査を行い、「ココニ稲田を作ラントスルハ最モ迂ナルヲ知ルベシ」と説いた。「迂」とは、「実情に合わない」の意である。ケブロンやクラークも、北海道では稲作は無理とし、麦作中心の大規模農業を提唱、何と食生活も米からパン・ミルクへと転換すべきと主張した。

開拓使は寒い北海道での米作はむしろ弊害になると、彼らの提案を受け入れ、稲作を禁止した。だが、米への執

着は、そんなお雇い外国人の建言ぐらゐで変わるはずもない。

中山久蔵

明治四（一八七二）年、島松に入植した中山久蔵は、大野産の「赤毛」「白髭」を持ち帰り、道央地方で初めての米作りに挑戦する。久蔵は試作の末、明治六年「赤毛」を稔らせた。

寒さに打ち勝つために、風呂を持ち出して湯を沸かし、温水を苗代に注いだ、などという逸話も残っている。道

北海道秘話 4 北歴史

開拓のころ 稲作は禁止されていた

ここ数年で格段においしくなつたといわれる、北海道の米。日本穀物検定協会が毎年実施している「米の食味ランキング」では、「きくら397」「ほしのゆめ」「ななつぼし」が「コシヒカリ」より味が上という評価も。一般家庭や飲食店などで、「米チェン」も進んでいる。そんな道産米であるが、開拓時代には生産が禁止されていたのである。

南よりも寒い道央の気候。並大抵の苦労ではなかつたであらう。その後久蔵は種籾を毎年増やし、明治十二年には日高の農家に分け与えるほどの収穫をあげるようになった。

その後も寒冷地向きの品種の確立に心血を注ぎ、空知・上川・十勝等に種籾を供給している。

酒匂常明

明治二十八年には琴似の江頭庄三郎が「赤毛」から耐寒性のある「坊主」種

を発見し、道内の米作は着実に改良された。さらに、進歩派の北海道長官、北垣国道がお雇い外国人たちの教えを守って米作に関心を持たない道内指導者層に見切りを付け、東京農業大学教授であり農商務省の技師でもあつた稲作の権威、酒匂常明を財務部長として道庁に招き、ここから米作の本格的な取り組みが始まつた。

稲作が北海道の開拓を進展させると考えた酒匂は、道庁の施策として米作りを奨励、稲作は大きく進歩した。酒

匂は中山久蔵を道庁の嘱託に任命し、各地の営農指導にあたらせた。

産米日本一

まだまだ個人レベルであつた米作を組合生産にまで押し上げたのが、栗山町の開祖、宮城県角田藩出身の泉麟太郎。

麟太郎は明治二十六年に水田の試作に成功。二十九年には角田村水利土功組合を結成し、資金繰りに苦労しながらも、酒匂の応援を受けて、四年後に

九〇〇ヘクタールの新田開発に成功、全道に水田ブームを巻き起こしていく。こうして北海道の米作は軌道に乗つた。そして、昭和三十六年、ついに産米日本一の座につく。その後生産調整という大波もあつたが、今でも道産米は生産量・作付面積ともに日本一の座を守っている。

味も日本一

課題は味であつたが、昭和五十五年から農業試験場などで収量より食味を重視した米の新品種開発に取り組み始めた。まず道立上川農試が「きくら397」を開発、平成元年から本格栽培

が始まつた。

十年近い歳月をかけて生み出された「きくら397」は、道産米のイメージを一新、平成十年度からはさらに食味の良い「ほしのゆめ」が登場した。そして十六年度には「ななつぼし」、十八年度は「おぼろづき」の本格栽培が始まり、今年からは「ふっくりんこ」の道内流通がスタート、来年は「ユメピリカ」と、さらなるおいしい米を目指して、研究が進められている。

さまざまな苦労を乗り越えて、不可能と言われた寒冷地での米づくりを成功させた道産米。味も日本一になつたといわれる今日の姿を、お雇い外国人たちの誰が予測し得たであらうか。



佐々木信恵さん

キツカケ

出身は青森です。高校生の時に札幌を旅行して大通公園がすごく気に入って、この街に住みたいと思って、フラッと来たんです。十九歳でした。

ある日アルバイト雑誌を見ると、『喜瀬ひろしのときめきワイド』の女性スタッフをSTVラジオが募集していたので、気軽に応募したんです。数名と書いてあるからほんの何人かしかならないかと思っていたら、二百人もの応募があったらしいんです。みんなスーツを着て来ているのに、私はホン

トにアルバイト感覚。フラッと訪ねたような状態だったのに採用してくれました。

そのうち、もともと文章を書くのが得意だったというのもあって、『北海道再発見』銅像がいくぞー!』という北海道の銅像を紹介する五分間のコーナーを持たせてもらうようになったんです。

自分の糧にもなると思い、やらせてもらったんですが、北海道に来たばかりで歴史も知らないし、ちゃんとしたラジオの放送原稿を創ったことも無かったので、悪戦苦闘しながら書いていま

した。
新たな展開

すると、そのコーナーが予想以上の好評を得たため、この頃から坪内プロデューサーの中には、これを母体にした偉人伝のドラマをつくりたいという、新たな構想があったらしく、ある時、『実は新番組を企画したんだが、その執筆をしないか。『銅像がいくぞー!』より少し難しいだけだ』と言われたんです。私も「やりたい」と二つ返事でした。ですから『ほっかいどう百年物語』の立ち上げ時には、既に一緒に動いていたような状態でした。

最初に黒田清隆とかケブロンを書い

Dilettante 悠々人語録

毎週日曜日の夕方午後5時からSTVラジオで放送されている『ほっかいどう百年物語』。北海道で活躍した人々の足跡をラジオドラマ形式によって感動的に伝えている番組です。その台本を番組のスタート時から書き続け、取り上げた人物の数が400人以上にもなるという放送作家の佐々木信恵さんの悠々人語録です。

たんですが、『銅像がいくぞー!』をチョッと直したぐらいだったんですよね。『銅像がいくぞー!』は三百回も放送していたので、「長くても一年ぐらいの仕事だろうから、ネタはいっぱいあるな」と思っていました。

『ほっかいどう百年物語』

ところが一カ月ぐらいたったら、「人が感動するようなものを書け」といきなりクオリティの高いものを要求されるようになった。でも、物語の山場の創り方も全く分からない。プロデューサーも「こうやって直せ」と具体的なことは言わず、ただ「これじゃ駄目だ」という言い方をするんです。ですから本当に自分で考えるしかありませんでした。放送は毎週日曜日にあるので、原稿用紙にして二十枚弱を一週間で仕上げなければなりません。悩んでも苦しんでも、放送に間に合わせるしかなく、ただただ時間との闘いでした。

ひとつのドラマを創るのに、資料となる本を、多い時では七、八冊読み、その中から人物の性格や苦悩、喜びを見出す。逆に、資料が少ない時には、その少ない中から人物像を浮かび上がらせなければならぬので、大変な苦勞でした。この番組は、人間の内面を描くドラマなので、絶対に年譜の羅列となつてはいけません。そうなる、重要なのは自分の想像力。それを身につけるため、とにかく本をたくさん読み、描写や表現の勉強をしました。

そんな毎日を通じているうちに、いつの間にか、趣味が「読書、仕事」になってしまいました。

文章を書く上での注意点は、「色を大事にする」こと。ラジオはテレビとは違い、目に見えないので、聴いている人が目に浮かぶような場面作りを心掛けました。切り口も、テレビでよくやるズームインやズームアウトを入れませんでした。その人にグッと迫ったり、全体の中で客観的に描いたり、というような手法ですね。

夢

小説やエッセイも書けるようになればと、札幌文学の同人に加えてもらいました。ノンフィクション作家の先生にもついで、史実を描く勉強もしています。来年、「ほっかいどう百年物語」は十年目の節目を迎えるので、もっとよりよい番組をつくって、北海道の皆さんに感動をお届けしたい。そして私も、いろいろな分野に挑戦して、さらに可能性を広げていきたいと思っています。将来的には『ほっかいどう百年物語』のよつな人物伝を、自分の名前を出すのが夢ですね。

佐々木信恵

ささき のぶえ

STVラジオ「喜瀬ひろしのときめきワイド」の電話オペレーターを経て、二〇〇〇年から「ほっかいどう百年物語」の構成・執筆を担当。現在はフリーライターとなり、テレビ、新聞、広告、雑誌など、幅広い分野で活動中。日本放送作家協会会員として、作文コンクールや高校ラジオドラマの審査員も務めている。

MY OLDIES いにしえのカラー印刷 原色版印刷

会社の応接室の本棚から一番古そうに見える本を一冊選んで手元持ってきた。「工業製品大辞典」もちろん旧字が殆どの七百五十頁ほどの古書だ。発行されたのは明治四十三年二月。印刷所の名は光村印刷。凸版によるカラー印刷、原色版印刷の高峰と言われた光村原色版印刷の前身だ。挿絵や写真をルーペで覗いて見ると、明らかに現在のものとは網点が違う。どちらかと言えば網点より線のほうが多い。特に挿絵の技術には目を疑うほどの超絶技に驚く。文選や組版にどれ程の時間が掛かったのか想像するのは難しい。これは単色だが凸版主流時代の印刷物だ。

日本では大正二・三年頃から和製オフセット印刷機が開発され始め、その数年後には多色オフセットが登場している。しかし、オフセットが主流になるのは昭和三十年代後半に

年にカラー製版部門が増設されている。その代表作とも言える一冊の本が手元にある。北海道新聞社発行「観光北海道」、印刷所の名はまだ中西写真製版株式会社。昭和四十年に発行されたこの本は、中西写真製版の原色版印刷の歴史を物語る一冊だ。二百頁ほどの本のカラー頁は全て凸版印刷で、三十頁弱ある。道内くまなく案内された作りで、歴史的な価値も高い。中西写真製版の職人のプライドと技術がぎゅっしりとつまった一冊だ。四十年以上も前の原色版印刷であることを考え合わせれば、かなり高品質な印刷物であると言える。さすがに古さを感じさせるが、カメラマンの技術も印刷の技術も大変高水準なものだ。中西印刷の写真製版技術は道内屈指だったのである。

現在我々はデジタル化とスピード化の波に飲み込まれ、毎日が時間との競争だ。遠く数十年前に思いを馳せれば、その時代の時間は実にゆっくり流れていたように思う。最後に中西写真製版所時代に制作し、昭和九年に発行された「函館大火災復興写真帳」(写真集)編集発行人菅氏の編集後記を紹介しよう。「略、旧師中西先生(創業者中西應策が写真技術の師であった)の營業を継承し、年々盛大に活躍せられつつある中西写真製版所の義侠的援助を得、此写真帳の出版を見た次第で大函館復興再建の道程に何等か寄與することあらば幸甚と存じます」(M)

映画「ブレッドランナー」の原作。核戦争後の死の灰が降り注ぐ荒廃した地球では他惑星へ移住しなかった(できなかった)人々が生活していた。そこへ植民惑星の奴隷として開発されたアンドロイド(アンディー)が火星から八匹逃亡してきた。アンディー狩り専門の警官「賞金稼ぎ(バウンティ・ハンター)」であるリックは、逃亡アンディー追跡中に負傷した同僚に代わって、賞金欲

く世界」がある。本物と偽物、現実と非現実とが渾然一体となって、読者にもついに両者の区別が付かなくなるような混乱した悪夢のような世界が淡々と描かれてゆき、ある種の恐怖心すら覚える。九・一一貿易センタービルテロ事件が起きた時に同様な恐怖心を感じた事を覚えている。ディックは既に四十年程前に、胡散臭い焦臭い作り物めいた現代社会を予感していたのかもしれない。

BOOK INFORMATION

ちょっと気になる一冊 受書紹介

「アンドロイドは電気羊の夢を見るか？」

フィリップ・K・ディック著

早川書房刊
定価七二〇円
(税別)

一九七七年
三月一日発行



しさに残党の「処理」を引き受ける。ところが彼は、アンディー捜査中に会った同僚の冷酷非情な仕事ぶりを目撃して、自分の職業に対し疑問を持ちはじめ、次第にアンディーに感情移入するようになる。ついに自分自身もアンディーではないかと疑うようになる。しかし、彼は迷いを振り切り残党を全て処理し無事賞金を手にする。

ディックが小説に描く主要なテーマの一つとして「現実が崩壊してゆ

そんな世界が映画の創作意欲をかき立てるのか、ディックの小説には映画化されたものが多い。「ブレッドランナー」「マイノリティ・レポート」「クロニン」「パイチェック」「スクリーマーズ」「トータルリコール」最近では「スキャナー・ダークリ」

「ネクスト」等である。最後の二編はまだ見てはいないが、その他の作品はディックの怪しい世界を十分に堪能出来るようになっている。(H)

中西出版 20周年

思い出の ラインナップ

昭和六十一年に「北海道の文化づくり」という大きなビジョンで中西印刷出版事業部が発足。二年後の六十三年に独立し、中西出版株式会社としてスタートしてから、今年で二十年目を迎えました。その間、約百七十冊の単行本を発刊し、多くの方々に読んでいただき、好評を得ています。

●風土の感触／木原直彦著

(昭和六十二年発行)

北海道文学館長時代の著者が綴る北の風土への熱い想いを、朝日新聞のコラム「防風林」に発表した八十八編を軸に、北海道とその文学・旅や身辺の様々を端正な筆致で味わい深く描く珠玉の随筆集。

●ありがとう青函連絡船「その80年の軌跡」／編集協力JR北海道

(昭和六十二年発行)

昭和六十三年青函トンネルの開業に伴い、青函連絡船が廃業となった。明治四十一年に始まる比羅夫丸就航から青函トンネル開通まで、青函航路にまつわる写真、資料に乗組員、作家のエッセイを加えて編集。

●北海道中ひざくりげ／NHK北海道中ひざくりげ取材班編(昭和六十二年発行)

昭和六十二年からNHKでテレビ放映された番組を編集。北海道の不思議発見掘り出しもの、道産子のこころいき、素朴で人情味あふれる人々とのふれあい、

地域に密着した確かな生活。北海道体験旅行のガイドにもなる。

●北海道昔ばなし／北海道口承文芸研究会編(平成元年発行)

北海道に伝わる昔話を道南、道央、道東、道北の四地区に分けて編集。各編三十話、カラー挿画入り。コンパクトなポケットサイズになっているので観光客の土産にもなる。

●手稲山紀行 傷ついた自然の側から／早川禎治著(平成十二年発行)

多くの札幌市民に親しまれている手稲山は著者が学生時代から親しんだかけがえのない山である。登山家でもある著者は、手稲山の登山を極めつくしている。しかし、一大レジャーランドと化し、自然破壊も極まった山の姿を見た著者は、傷ついた手稲山の声なき声を聞き、人間の身勝手さに抗議している。

●ほっかいどう百年物語／STVラジオ編(平成十四年発行)

STVラジオで毎週日曜日午後五時から放送されている番組「ほっかいどう百年物語」(平成十二年放送開始)をまとめたものである。榎本武揚や松浦武四郎、黒田清隆、高田屋嘉兵衛、クラーク博士をはじめ、登場する三十八人は様々な面で北海道の発展に尽力した人々。その業績などは有名だが、苦悩や努力などのエピソードは知られていないことも多い。現在、第9集を編集集中。

●大地の砂金―砂金掘り物語と平成の砂金掘り―／脇とよ・北代祐二著(平成十七年発行)

明治、大正から昭和にかけて北海道の砂金掘り師として名高かった、渡辺良作の一代記「砂金掘り物語」に加え、平成砂金掘りの実践をここに紹介。北海道の自然に包まれた美しい川で砂金掘りを楽しむ情報が満載。その魅力と掘り方を詳しく平成の砂金掘りが語る。

●おぼけのマールとまるやまどうぶつえん／絵なかいれい 文・けいたろう(平成十七年発行)

札幌在住のイラストレーター中井令さんによって子どもたちの人気者マールと動物たちをこころ温まるタッチで描きあげた。シリーズ第二作に「おぼけのマールとゆきまつり」、第三作に「おぼけのマールとおべんとつ」がある。

●ほっかいどうの犬犬／丸浦正弘著(平成十九年発行)

北海道の犬犬たちは、なにゆえ姿・かたちが目白ののか? 筆者はそんな疑問の芽生えから、神社を訪ね約八年。その数なんと二千三百力所。出会った犬犬の数は九百対! 北海道犬の歴史を辿る。

●北海道の将来を展望する／北海学園大学経済学部「コープさっぽろ寄附講座運営委員会監修(平成二十年発行)」

創造性豊かな地域づくりに貢献する目的で「コープさっぽろ寄附講座」が企画され、地域貢献を重視した北海学園大学経済学部の教育理念とも符合するということで、二年間にわたり「21世紀・北海道の将来を展望する」をテーマに講座が開設された。本書はシリーズ三部作として、十一月に第二集が発売される。

(紹介した出版物のなかには現在品切れの本もございます)



■編集部から “読書の重要性を95%が認識”読者世論調査の結果です。若者の活字はなれと言われているが、書籍と雑誌の読書率は3年連続増加。特にケータイ小説の人気で10代後半が最も高い。結果に反してここ数年、書籍・雑誌販売額・部数の伸び率がマイナス基調が続いており、現在は「出版不況」。北海道における出版事業はとりわけ難しい。地域文化の活性を旗印に出発した中西出版は、お陰様で今年20年目を迎えることができました。これからも地域文化に密着しながら全国に向け情報発信を続けていきます。(K)

●発行・編集／中西出版あうる編集部
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
TEL (011) 785-0737 FAX (011) 781-7516
URL : <http://owl-online.jp>
E-mail : owl@nakanishi-shuppan.co.jp
●発行責任者／林下英二
●発行日／2008年10月31日 ●デザイン／上野修一



ホームページへ
アクセス!